

# 検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報[号外] 2010年12月16日 発行 日本鉄道労働組合連合会(JR連合) [No.176]

## 松崎氏の死去で革マル中央とJR革マルとの関係はどうなる？

JR東労組松崎明元会長の死去は、革マル派、JR内革マル派、JR総連と東労組などの構成組織、そしてJR東日本を中心とする労使関係にどのような影響を及ぼすのであろうか。これまでの検証を基に、その可能性を指摘したい。

まず、革マル派中央やJR内革マル派との関係についてはどうか。警察が作成したとみられる、96年に警視庁が摘発した革マル派「綾瀬アジト」からの押収物の解析資料には、「副議長と言われているJR東労組会長の松崎明は、現在も革マル派の最高幹部であり、組織内では絶対的な権限を有している」などと記載されている(「No.64」「No.65」)。また、同資料には、1989年以降、革マル派内で黒田寛一議長ら党中央と、沖縄県委員会、およびこれに同調したJR内革マル派との間で深刻な対立が起こったことも記載している(「No.153」)。これについては、松崎氏らJR総連関係者43名が原告の「JR革マル派43名リスト裁判」の2010年6月30日に原告側が提出した準備書面にも同様の対立の経過が記載されており、こうした事実の存在をJR総連自らが認めている(「No.152」)。

そして、元JR東労組中央執行委員(現JR労組委員長)の本間雄治氏は、週刊現代裁判での証人尋問(2009年3月3日)で、この対立に関して、革マル派中央からは弁護士(W氏)、JR内革マル派からはJR総連前委員長の小田裕司氏とJR東労組前委員長の石川尚吾氏が出席し話し合いが持たれたと述べた(「No.46~48」「No.161」)。これについては、上記「リスト裁判」の原告準備書面でも両者の「交渉の場の設定」を認めており、革マル派中央がJR内革マル派の要求に応じなかったと記載している(「No.152」)。

### 革マル派中央の動きは松崎氏以外では到底収めきれない！？

そしてこの問題の収束については、「No.156」の通り、宗形明著「異形の労働組合指導者『松崎明』の誤算と蹉跌」(高木書房)に以下の記載がある(p.25~)。

革マル派のカリスマ議長黒田寛一がどうにもならなくなった「沖縄革マル組織問題」は、1995年に入り松崎が本格的に收拾に乗り出したことによって、年末までにほぼ収まった。そして、1996年10月13日、革マル派「ハンガリー革命40周年政治集会」で、同派創設以来のカリスマ議長黒田の“辞任”と「植田琢磨」などこの誰とも知れない新人の“議長就任”が公表されたのであった。...(中略)... 私は黒田と松崎の勝負はこの時点で、「けりがついた」のだろうと思う。

革マル派内部の「対立」の真相は推認するしかないが、JR総連委員長とJR東労組委員長では埒があかない問題でも、松崎氏は、革マル派創始者の黒田議長をも抑えて収束させてしまったという。革マル派中央とJR内革マル派の間では、2000年頃に「坂入氏拉致事件」などで再び「対立」が顕在化し、当時のJR総連小田委員長が警察に告発までして大騒ぎしたが、2002年以降は突然静まり返り、革マル派機関紙「解放」にはJR総連に対する記事が見当たらなくなった。なお、激しい「対立」の最中にも、なぜか「解放」には松崎氏批判は一言もない。こうした状況証拠からみて、革マル派中央、JR内革マル派ともに、松崎氏が組織をコントロールしていたと考えざるを得ない。JR総連や東労組のトップのクラスでは到底収めきれないものと想定される。原理主義の革マル派中央は、松崎氏亡き後、JR内革マル派への対応を含め、どのように行動するのか、大いに注目される。